2025 年（令和 7 年）12 月 22 日

「辰野町立小・中学校あり方検討委員会」論点整理

辰野町立小・中学校あり方検討委員会

1　はじめに

本委員会においては、2023 年（令和５年）９月に制定された「辰野町立小・中学校あり方検討委員会設置要綱」に基づき、2028 年度（令和 10 年度）以降の小・中学校のあり方について、町の教育理念と方針を受け、急激に進む少子化社会にあっても小・中学校が魅力ある学びの場となるために、少子化の進展に対応した望ましい教育環境等について、2024 年（令和６年）１月より 10 回にわたって検討を重ねてきた。少子化の進展に対応した新たな学校のあり方、学び方・教室の風景、学校と地域との連携等について自由に意見を出し合いながら討議を進め、これからの時代にふさわしい小・中学校のあり方について、ここに検討の結果を整理した。

この論点整理は、今後町教育委員会が新たな小・中学校のあり方、方向性を具体的に検討していくうえでの基本方針となるものであると共に、住民の皆さんにとっても将来の小・中学校のあり方を共に考えていただくための試案となるものである。

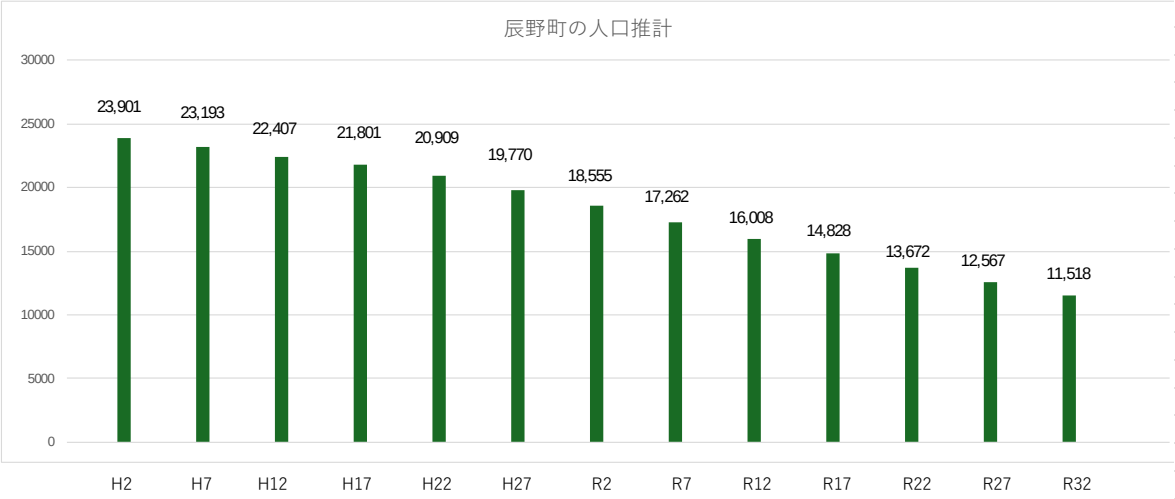
町教育委員会では、この論点整理をもとに、町と共に、新たな小・中学校の姿、教育方針、学校の具体的な場所、時期、財政面等について協議を進め、地域での説明会を開催するなど住民の皆さんの意見を聞きながら検討していくことになる。

2　辰野町の小中学校をめぐる現状

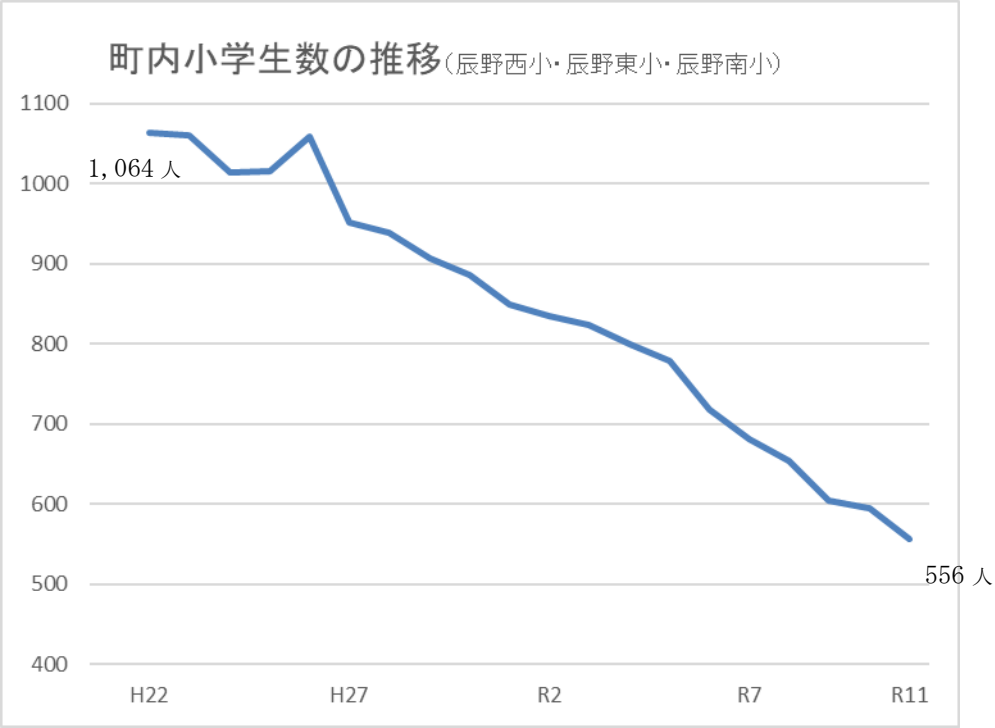
（１）辰野町の人口及び児童生徒数の推移

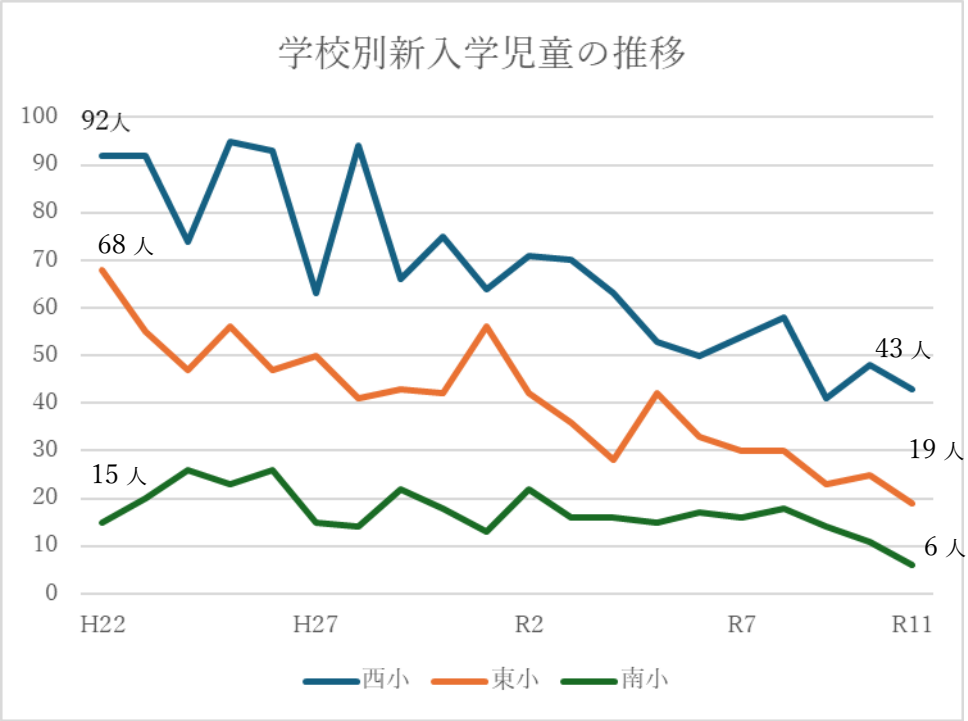
2025 年（令和 7 年）の町の人口は 17,262 人と 2000 年（平成 12 年）の 22,407 人から、25 年間で約 5,100 人、約 23％減少している。人口推計ではさらに減少を続け、25 年後の 2050 年（令和 32 年）には 11,518 人と約 5,700 人、約 34％の減少が見込まれている。

人口は 2000 年（平成 12 年）から 50 年間で約 49％減少するのに対し、小学校児童数（辰野西小学校、辰野東小学校、辰野南小学校）は、2010 年（平成 22 年）の 1,064 人から 2029 年（令和 11 年）には 556 人へと 20 年間で約 48％の減少が見込まれる。学級数では町全体で 35 学級から 24 学級と 11 学級の減少であり、１学級の人数が 10 人を切る学年も出てくる。2029 年（令和 11 年）の入学予定者は 68 人であり、単純に計算すると、町内全体で２学級に収まってしまうことになる。



（資料）　H2からR2まで国勢調査より
R7からR32まで国立社会保障・人口問題研究所





（２）学校教育に求められるもの

急激に進むＩＣＴ化とＡＩの導入、社会の価値観の変化等予測困難な時代を生き抜いていく子どもたちには、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められている。学校での学びを通じ、子どもたちがそのような「生きる力」を育むために、2020 年度（令和２年度）より実施されている現行学習指導要領では「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業を改善する「主体的・対話的で深い学び」を子どもたちに求める学びの姿としている。具体的には、

・一つ一つの知識がつながり、「わかった！」「おもしろい！」と思える授業
・見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業
・周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業
・自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業

を工夫して、子どもたちの資質・能力を育んでいくこととしている。

2021 年（令和３年）１月に中央教育審議会より答申された「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、全ての子どもたちの可能性を引き出す、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実が示され、子どもたち一人一人が、自分なりの問いを立て、自分なりの学び方を選択し、必要に応じて必要な人と共に学び合いながら、自分なりの答えにたどり着くような授業づくりを進めるとしている。

以上のように、子どもたち一人一人の学びを充実させ、「生きる力」を育んでいくためには、『個別最適な学び』と共に『協働的な学び』を充実させることが大切である。集団での学びを通して、一人一人の良さや可能性が生かされ、異なる価値観や考え方に触れて一人一人の学びがより深まっていくことが求められているのである。

３　辰野町が目指す教育ビジョン

（１）基本理念

一人一人の個性や特性に応じた学びを支援することを通して、将来に向かって学び続ける子どもの育成を図る。

（２）育てたい人間像

①　広い視野と豊かな創造力を持った子どもの育成を図り、これからの予測困難な社会にあっても力強く生き抜く力を備えた人

②　ふるさと『辰野町』に学び、故郷に誇りや愛着を持った人

（３）辰野町が目指している教育

①　未来に向かって生きる（伸びゆく）「たつのっ子」

・確かな学力　・豊かな人間性　・健康・体力

４　今後の課題

町の児童生徒を取り巻く小・中学校の今後の教育環境をみたとき、急激な少子化による学びの集団が小さくなることにより、人間関係が固定化したり、多様な考えを基により深い学びを実現させることが難しくなったりする。学級数の減少に伴い配置される県費教職員数が減少する等課題が山積し、現在の学校配置では、活気ある良好な教育環境を継続的に維持していくことが極めて困難な状況になることが想定される。

しかし、子どもたちの学びの場である義務教育の質的充実は常に確保されていなければならず、将来を展望した新しい学校の形を検討していく時期に来ている。

５　検討事項

（１）少子化の進展に対応した新たな学校づくりに関する事項

①　少子化の進展に対応した望ましい教育環境のあり方に関する事項

ａ：小・中学校の配置及び通学区に関する事項

・学びの適正規模、適正配置及び学校制度　等

ｂ：小・中学校間の連携のあり方に関する事項

②　小・中学校と地域との連携のあり方に関する事項

ａ：辰野町の良さ、特徴を生かした新たな教育課程等のあり方に関する事項

・学校制度及び教育課程の大要　等

ｂ：教育課程外の活動のあり方に関する事項

ｃ：放課後及び課外活動の位置づけ及び地域連携に関する事項　等

（２）就学前から一貫した支援・指導のあり方に関する事項

①　多様化する児童生徒への支援・指導のあり方に関する事項

②　保育園から小学校・中学校の連携のあり方に関する事項

③　保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした学校づくりに関する事項

（３）その他、教育委員会が必要と認める事項

６　検討事項にかかわっての論点整理

（１）少子化の進展に対応した新たな学校づくりに関する事項

①少子化の進展に対応した望ましい教育環境のあり方に関する事項

○急激な少子化を考慮し、学びの集団としての人数、複数の学級を確保し、活気ある良好な教育環境を継続的に維持していくために、３つの小学校（辰野西小学校・辰野東小学校・辰野南小学校）を何らかの形で集約（再編）したい。

・子どもたちが一定規模の集団生活を送る中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、一人一人の資質や能力を伸ばしていく学びが期待できる。

・「主体的・協働的な学び」等、多様な学習形態を取り入れた教育が可能になるため、子どもたちが社会で必要とされる資質・能力を身に付けることが期待できる。

・学年に複数の学級が保障されることにより、クラス替えが可能となり、固定化された人間関係がリセットされ、子どもたちは、より多くの友だちと人間関係を築くことが期待できる。

○小・中学校の９年間で育てたい人間像に向け、９年間の連続した学び、活動が可能

となるよう、小中一貫教育（小中一貫型学校・義務教育学校）を推進したい。

・町教育委員会の基本理念、育てたい人間像に沿って、小学校と中学校が同じ教育目標のもと、義務教育９年間の教育課程を系統的に編成した教育活動を行うことにより、子どもたちの学びが校種を超えても途切れることなく紡がれていくことが期待できる。また、中学校教員が小学校で「教科担任制」を実施することにより、より専門的な学習が可能となると共に、中学校の学習内容へのスムーズな接続が期待できる。

・小１～中３という、広い年齢層が同じ環境で様々な学年の子どもと交流することにより、下級生の上級生への憧れや尊敬の気持ち、あるいは上級生の下級生への思いやりや自主性、指導力等が育まれることも期待できる。

・教職員にとっても小中一貫教育を行うことにより、小・中学校の枠を越えて互いに連携・協働し合いながら、よりよい教育の創造を目指していくことが期待できる。また、多くの教職員の目で子どもたち一人一人を継続して見守っていくことも期待できる。

○学校を集約することにより生じる、通学や地域とのかかわり等の課題について配慮したい。

・学校が遠くなり歩いて通えない
・通学時の安全面が心配
・道草ができない
・地域の自然や地域社会とかかわる機会が減る
・学区が広くなることにより学校支援ボランティアのかかわりが難しくなる
・今までのように学校と地域とがかかわれるのか
・人口減少により、地域の中でも子どもとかかわれる大人が減っていく

等の課題も生じることが考えられる。

これらの課題については、今後検討した上で新たな学校の姿を構築していくものである。

○学校を集約する時期、場所、集約した後の学校制度等の詳細については、将来にわたり望ましい教育ができる形態や環境を見据え、十分な検討を行ったうえで進めていきたい。

② 小・中学校と地域との連携のあり方に関する事項

○新たな学校でも、学校と地域とで連携・協働して子どもたちを育てていくことを大事にしたい。

・小・中学校では現在、地域の「ひと・もの・こと」を中心に多くのことを学んでいる。新たな学校でも、町の魅力、特色を生かした教育課程を編成し、体験を通した学びを大事にしながら、町への愛着を深めたり誇りを持ったりする心の育成を期待したい。

・引き続き学校支援ボランティア等学校と地域とで連携・協働して子どもたちを育てていきたい。地域の方々と共に取り組む探究的な学びも大事にしたい。

・町には地域が学校を支える気風があり、従来より学校と地域が育てたい子ども像を共有しながら連携・協働して子どもたちを育ててきた。子どもたちが９年間を通して町の様々な人々との出会いの中で、自らの生き方を考えることができるよう、今後も子どもたちと地域とのつながりを期待したい。

・子どもたちが地域の行事等に参画することにより、地域で地域の子どもを育てていくことも大事にしたい。

・子どもたちにとって、地域に育ててもらっていると感じられる学校、ここで育ててもらってよかったと思えるかかわりをめざしたい。

○自然体験、社会体験等五感を使った学び、キャリア教育等社会とつながる学びを大切にしたい。

・今後ＩＣＴの活用がさらに進んだりＡＩが導入されたりしても、五感を使った実体験を「学び」の原点としなければならないことは言うまでもない。

> 子どもたちは、具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころに、感動したり、驚いたり、疑問をもったりしながら学んでいくものである。人生の中で最も感受性豊かな小・中学生期の子どもたちにとっては、実体験を通しての学びが、次の新たな学びのためのエネルギーとなる。

・積極的に校外に出て、自然体験や社会体験を行うことを通して、心身共に健康でバランス感覚を持った子どもの育成を期待したい。

○教育課程外の活動のあり方、放課後の子どもの居場所、課外活動の位置づけ及び地域連携については、今後別の組織（委員会）、新たな場で検討していきたい。

・中学校部活動の地域展開、小学校放課後学童クラブのあり方等については、当委員会とは別の組織において検討が重ねられていく。

（２）就学前から一貫した支援・指導のあり方に関する事項

①　多様化する児童生徒への支援・指導のあり方に関する事項

〇多様な背景を持つ全ての子どもたちが共に学び、共に育つ教育環境を検討したい。

・障がいのある子どもや学習面・行動面で著しい困難を示す子ども、外国にルーツのある子ども※、また、特異な才能を持つ子どもなど、多様な背景を持つ全ての子どもたちが共に学ぶことで、一人一人の子どもがその子らしく育っていくことを大切にしていきたい。

※ 外国籍児童を含め、日本語を家であまり話さないすべての児童生徒

・不登校・不登校傾向の子どもや、人間関係（友だち・先生・家庭、いじめ等）の状況の変化等、一人一人の状況を踏まえた学びの場、居場所を提供することを通して、誰一人取り残さない教育を進めていく必要がある。

②　保育園から小学校・中学校の連携のあり方に関する事項

③　保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした学校づくりに関する事項

〇保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした教育の推進に幅広く取り組んでいきたい。

・幼保・小の連携については、子どもの姿や保育・教育環境、職員や教員の指導・支援等について互いに学び合うことを通して、それぞれの保育・教育の一層の充実に期待したい。

・保育園・幼稚園から小・中学校、さらに高等学校から短期大学まで揃った町内の教育環境を有機的に生かし、より効果的な教育の提供を図ると共に、それぞれが抱えている教育諸課題にも対応するため、各教育機関どうしの連携、交流による教育環境の整備・向上に引き続き取り組むことを期待したい。

7　検討の経緯

（１）第１回　　2024 年（令和６年）１月 25 日（木）午後６時 30 分～

①委員会設置要綱の確認

②正副委員長選出

・委 員 長：　増澤　利定　さん（学識経験者）

・副委員長：　小口　美景　さん（一般公募）

③協議事項

ａ：新たな「辰野町立小・中学校あり方検討委員会」の立ち上げについて

学校を取り巻く社会的環境は大きく変化し始め、全国的規模で進む人口減

少・少子化は、辰野町においても同様であり、かつ深刻な問題となっており、３年半余に及ぶコロナ禍がこの問題に一層拍車を掛けてしまっている。
　少子化により子どもの数が減少していっても、社会性を身に付ける場としての学校の教育環境の水準は維持されなければならない。そこで、少子化に対応する学校のあり方を協議していきたいと考え、「辰野町立小･中学校のあり方検討委員会」を立ち上げることとした。単純に、子どもの数が減少するので複数の学校を一つにまとめて検討は終わりということではなく、一つにするだけでよいのか、これからの社会を生き抜く子どもたちへの学校教育として、統合したその先どのような学びが期待できるのか、地域とはどのような関わりができるのかまで、深い協議をお願いしたい。

ｂ：町内小･中学校の現状について

　町内の 18 歳未満の状況から地域別数、学校別推定入学児童数を説明。2012 年(平成 13 年)県内での統廃合にあった小学校、辰野町内の小中学校の歴史を説明。

ｃ：検討委員会の進め方について

　委員会は２ヶ月に１回の開催を予定。毎回議事録を作成し、委員確認の上、資料と共にホームページへ掲載。協議を進める中で、県内先進地の視察を実施し、大まかな論点整理ができたところで、パブリックコメントの実施を予定。

（２）第２回　　2024 年（令和６年）４月 25 日（木）午後６時 30 分～

①協議事項

ａ：委員会開催内容及びスケジュール

　今後の委員会の大まかな検討事項について目安を提出、意見をいただく。令和８年２月に委員会としての提言を辰野町教育委員会に提出する。

ｂ：辰野町小中学校児童生徒数の推移について

　令和６年、令和 10 年（推計）の町内 4 小学校と 1 中学校の児童生徒数を資料を元に発表、各委員に理解をいただく。

ｃ：ワークショップ「辰野町の特色を生かした学校のあり方、地域と連携した教育課程のあり方」について

　４テーブルに分かれて「辰野町の特色を生かした学校のあり方、地域と連携した教育課程のあり方」をテーマにワークショップ（ワールドカフェ方式）を行う。

◎こんな学校ができたらいい

・児童生徒数、学級数の多い学校。多くの人とかかわることができ、様々な体験が可能になる。複数の学級があることで学級編成替えが可能になり、人間関係の面からもよい。
・学級の数が少なくて他に行く場所がないと、学校に行きずらくなる。
・学校を一つにまとめる。クラスマッチや遠足等の行事を皆と一緒に共通の目的をもって楽しむことができる。
・辰野町の特色を生かし、保育園から短大までの一貫校にする。
・現在のニーズに合った多様性を持ったカリキュラムを、小中一貫校にして9年間で系統的に学習する。中１ギャップもなくなる。
・今の各学校の魅力や特色を大切にした一貫校に。
・１・２・３年は少人数、４・５・６年は大人数（辰野モデル）
・子どもたちの様々なニーズに対応でき、また、様々な選択肢のある学校。多様性を持った子どもたちが学べる環境にあるとともに、つまずいた時の居場所が確保できるように。
・子どもも親も教師も笑顔があふれ、みんなが元気で楽しめる学校。いじめ、不登校のない学校。
・通学での学び、体験も大切にしたい。

◎子どもたちにこんな学びをさせてあげたい

・自然と触れ合う教育を大切にしたい。
・自然体験、社会体験等体験を大切にした学び。
・多様性、多人数の中で、様々な体験をさせてあげたい。
・キャリア教育等社会とつながる学びを。

◎地域はどのようにかかわったらよいか

・子どもと大人との触れ合いを大切にしたい。
・地域で子どもを育てることを大事にしたい。
・地域の思いを大事にしたい。
・地域の人も一緒に楽しめる学校。
・学校の中に公民館を。
・地域の特色を生かした教育を。
・放課後の子どもたちの学びの確保を。
・地域との協力等、学童のあり方を考えたい。

・地元の思いとしては、保小を残したい。

◎その他
・スピード感をもって進めたい。
・1 学年 10 人以上なら存続した方がいい。
・町としても子どもを増やす方法を考えたい。

（３）第３回　　2024 年（令和６年）７月９日（火）午後 6 時 30 分～

①協議事項

① 資料の確認

ａ：前回お持ち帰りいただいた資料の確認

「辰野町立小・中学校のあり方に関する提言書（平成 29 年９月）」「町内小中学校の今後に対する辰野町教育委員会の見解」「辰野町の目指す教育ビジョン」について、資料に基づいて説明する。

ｂ：グループ討議「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方について」

「前回のワークショップの論点整理」「これからの学校教育に求められること」「令和 10 年度～12 年度辰野町児童生徒数」の資料をもとに、３グループに分かれてグループ討議を行う。

テーマ「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方」
～少子化の進展に対応した学校～
～多様な子どもたち一人一人を大切にする学校～
～これからの社会を生き抜く子どもたちを育てる学び～
～地域と共に歩む学校～

◎学校を集約する
・人とのかかわりが多く持てる。
・学級数が維持でき学級編成替えが可能である。
・豊かな体験ができ、多様性を大切にした学びも可能。
・教職員の確保ができる。
・集中してお金をかけることができ、施設・設備面からもよい。

◎集約にあたって出された意見
・小中一貫校、義務教育学校にする。
・まずは小学校を集約し、いずれ小中まとめる。
・西小と東小で大きな学校、南小を小さな学校。選択、多様性、ニーズに対応できる。
・低学年は地域、高学年は一つ。通学、地域とのかかわりへの配慮。

・集約すると、地域との連携が難しくなるのでは。

◎その他
・不登校・いじめへの対応を。
・つまずいた時の居場所の確保が必要。
・地域との連携を大切にしたい。
・カリキュラムをどの様にしていくか。
・専門的な学びができるように。
・どのような教育を大事にしていくかも考えていきたい。
・10 名の基準はこのままでよいのでは。

（1）第４回　　2024 年（令和６年）10 月４日（金）午後 6 時 30 分～

①協議事項

ａ：グループ討議「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方について」

「前回のワークショップの論点整理」をもとに、３グループに分かれてグループ討議を行う。

テーマ「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方」
少子化の進展に対応した新たな学校
～学校を集約するにあたってのメリット、課題等～

◎学校を集約することのメリット
〇少子化への対応
・少子化から見ると集約がどうしても必要。
・人口の見通しからいうと集約せざるを得ない。
・思い切ったやり方をしないと新しいものは生まれない。
〇多くの人数
・多くの人とかかわれる。
・いろいろな考えにふれることができる。
・大きな学校で切磋琢磨し、社会で生きていく力をつける。
〇複数の学級
・学級編成替えが可能となる。
・人間関係がリセットできる。
・固定化された序列が崩れる。
・学年としての活動に幅が生まれる。
〇施設・設備面
・一つにお金がかけられる。
〇教職員の確保
・多くの人数が確保できる。

◎学校を集約することのデメリット・課題等
〇通学の問題

・歩いて通えない　道草ができない　体験が不足
〇地域とのかかわり
・地域感情、地域の文化の問題。
・学校支援ボランティアをどうするか。

◎新たな学校のかたち
〇小中一貫校
・小中の連続した学びが可能。
〇義務教育学校
・９年間一貫した教育課程で系統的に学べる。

◎課題等への対応等
〇低学年は地域、高学年は一つ。　→通学、地域とのかかわりへの対応
〇つまずいた時の居場所
・学校の中で小さな居場所の確保。
・リモートで対応。
〇不登校、いじめを前提とせず、不登校、いじめのない学校をめざしたい
〇幼保も合わせて考えたい
・発達段階に応じた学びとつける力。
・中学生が園児の面倒を見るよさ。

◎進め方等
・先に方針、ゴール等を示して進めた方がよい。
・辰野町として学校のあり方を考える時期に来ている。
・今の進め方は、丁寧な進め方でよい。
・財政の面を切り離して考えることはできない。

◎「少子化の進展に対応した新たな学校」として、学校を集約せざるを得ない。

（５）第５回　　2024 年（令和６年）11 月 25 日（月）午後 6 時 30 分～

①協議事項

ａ：「辰野町の新たな学校」について、学習会と意見交換

「小中一貫校」と「義務教育学校」について事務局より資料に基づいて説明。それを受けて、質疑応答と意見交換を行う。

・長野県内の小中一貫教育校の現状はどのようになっているのか。
・義務教育学校の保護者の意識はどうか。
・長野県の教育の動向はどうか。

・教員が小学校、中学校の両方を経験することはとても意味がある。
・学校長が替わることにより、教育方針が変わることが心配。
・信濃小中学校（義務教育学校）では、100 回以上の検討会議により、子どもたちのために様々な準備をして開校している。
・自分たちが、このことにどれだけ情熱を傾けることができるかが大事。課題をみんなで解決しながら前へ進んでいきたい。
・いずれにしても、小中一貫校、そして義務教育学校にしていかなければいけない。
・私たちが学校に求めるものは何かを検討して、その延長線上に学校のあり方があってほしい。
・この検討が、財政の問題も含めて、どのような形で整理されていくのか。

（６）第６回　　2025 年（令和７年）１月 30 日（木）午後６時 30 分～

①協議事項

ａ：「小中一貫校」と「義務教育学校」についての学習会

「小中一貫校」と「義務教育学校」について、前回残された課題を中心に学習会を行い、理解を深めた。

ｂ：グループ討議「学校をどう集約していくか」

これまでの討議等をもとに、２グループに分かれてグループ討議を行う。

◎学校をどう集約していくか
・段階的に、小学校を一つにして、それから小中学校１校（小中一貫教育校）にする。
・小学校の集約については、既存の建物を使うのがよい。
・段階的に進めると時間がかかるので、一気に進めた方がよい。
・小中一貫教育校は、義務教育学校がよい。
　長いスパンの教育　自由なカリキュラム　個性能力を伸ばせる
・小学校中学校は、建物を分けた方がよい
・既存の建物を使うのがよい

◎その他
・町民への周知、地域の理解が必要である。
・スピード感をもって進めたい

（７）第７回　　2025 年（令和７年）５月 21 日（水）午後６時 30 分～

①協議事項

ａ：グループ討議「「集約した学校でどのような学びを保障するのか」「多様化する子どもたちに対応した学校はどうあったらよいか」「地域との連携をどのようにしていったらよいか」

◎集約した学校でどのような学びを保障するのか

・柔軟な発想で様々な体験ができる。（自然体験、社会体験等）
・多様な考え方に触れる学び。（異学年との交流・地域との交流等）
・多くの友だちと学び合い、高め合えるようにする。
・キャリア教育等社会とつながる学び。

◎多様化する子どもたちに対応した学校はどうあったらよいか

・特別な支援が必要な子どもも共に学ぶ。
・多様な背景を持つ子どもたちが共に学ぶ学校。
・不登校・不適応傾向の子どもに対する手厚い支援。
・人間関係の状況の変化に対応できる場所を確保する。（人間関係〈友だち・先生・家庭等〉、いじめ等）

◎地域との連携をどのようにしていったらよいか

・学校が集約されると、子どもたちにとっては学ぶ地域が広がるよさがある。
・地域を学ぶ機会を作ったり、地域行事に参画する機会を意図的に作ったりする。
・子どもたちが地域のことを学ぶ機会を大事にする。縦割りで地域のことについて学ぶ。
・学校支援ボランティア等地域とのかかわりを引き続き残す。
・集約された学校に地域住民が入ることで、伝統が引き継がれていく。
・公民館等人が集まる機能を備える。平日に学校を開放する。

◎その他

・今ある学校のよさを引き継いでいく。
・辰野町の教育ビジョンとリンクさせ、辰野町に合ったやり方で学校づくりを進める。
・辰野町の学校に通いたいというような学校をつくる。
・お金をかけてしっかりとした施設にする。町のバックアップが必要である。

・小中の敷地は一体にして、中１ギャップの解消をはかる。
・やわらかい発想で、学校教育を変えていく。
・家庭教育も大事に考える。
・先生方に余裕のある学校にする。
・先生方の意見も聞きながら進めていく。
・みんなが分かりあったうえで、統合を進めていく。
・10 年先のことを決めるリスクも考えたい。
・学校がなくなることで、若者の流出、子育て世代の居住地の選択から外れてしまう。
・市町村を越えて考えていくことも必要である。

（８）第８回　　2025 年（令和 7 年）７月 21 日（金）午後 6 時 30 分～

①協議事項

ａ：小中一貫教育の方向を確認

集約した新たな学校では、小学校と中学校が同じ教育目標のもと、義務教育９年間の教育課程を系統的に編成した教育活動を行う小中一貫教育を推進していく方向を全体で確認した。

ｂ：全体討議「集約した学校で、子どもと地域とのかかわりをどのようにしたらよいか」

◎子どもたちが地域を学ぶ

〇地域のことを学習

・生活科、社会科、総合的な学習の時間等で地域のひと・もの・ことを中心に多くのことを学んでいる。
・幼稚園・保育園との交流も盛んである。
・低学年は、身近な地域で学ぶことが大切だが、集約するとそれが難しくなる。
・中学校では総合的な学習の時間で、町のことを学び、町への提言をすると共に、自らの生き方を考えることにもつながっている。
・中学校では、現在も地域とつながりのある学びはたくさんあり、これはずっと続いていくと思う。
・地域の人に支えられているということ、地域の人の思いを学んでほしい。
・人と人とのかかわりを学んでほしい。
・五感を使った体験を大事にしてほしい。

〇地域行事への参画

・ほたる祭り、地域のお祭り、地域の文化祭等に出演したり作品を出品したりと多くの参画が見られる。
・地域行事を通じて、地域の子どもを地域で育てていきたい。
・地域の温度差が大きい。
・分館の行事等で地域の子どもを育てたい。
・地域の行事に子どもが集まらない。地域の行事が大事にされていない。
・地域の行事が子どもたちにとっておもしろいと感じられるものになっているか。

◎学校と地域との連携

・学校支援ボランティアとして、学習支援、環境整備、安全確保、行事支援等で多くのかかわりが見られる。
・子どもにとって、自分の家族が地域や学校とどのように関わっているのかがその子の将来につながるのではないか。
・組織さえ作れば、集約した学校であっても、今の連携は可能である。
・学校からのはたらきかけで地域との連携を考えていくことは可能である。
・地域とのつながりが中学校の教育課程にたくさん組み込まれている。
・集約しても、町全体で子どもたちを見ていきたい。
・学校ボランティアは未来への投資である。
・地域の大人と気軽に話せる環境が大事である。
・地域の大人との触れ合いが、コミュニケーション能力につながると思う。

◎その他

・子どもたちが大人になった時に地域に残ってほしいという視点が大事。
・地域の学びが少なくなっても、学校を集約することの方が子どもの学びにとってメリットが大きいのであれば、仕方がない。
・学校は、その地域にとって大きな比重を占める。大事な資源の一つである。
・ＩＣＴ教育も扱ってほしい。
・子どもたちには将来グローバルな立場で働いてほしい。外に出た方が面白いし、帰っても仕事がないという現状もある。
・地域に残ることが、子どもたちにとって幸せなのか。
・学校にとって、地域にとって一番大事なのは子どもである。
・主体的な行動、主体的な学びのためには五感を使った学びが大事である。

（９）第９回　　2025 年（令和 7 年）９月 30 日（火）午後 6 時 30 分～

①協議事項

ａ：全体討議「検討事項にかかわっての論点整理」について

・少子化の進展に対応した新たな学校づくりについて

・就学前から一貫した支援・指導のあり方について

第１回から第８回までの検討の結果を整理した「論点整理」について、全体で検討した。

◎3 つの小学校を集約するにあたっての課題

・「めやす」「基準」を設けるべきではないか。例えば「１学級で 10 人を切ったら」「１～６才児の合計が 60 人を切ったら」といったように。

・安全な通学環境を考慮したい。

◎地域とのかかわりにおける課題

・地域の人と子どもたちとの顔の見える関係　時間、空間、しくみが必要である。

・低学年の子どもたちが「地域」をどのように学ぶか考えたい。

・保護者、PTA とのかかわりも大事にしたい。

◎幼保・小のつながりについて

・お互いに学び合うかかわりを大事にしたい。

・小学校の「評価」が幼稚園のでの評価と変わってしまうことが課題である。

・小学校でも引き続き一人一人を大事にしてほしい。

◎「五感を使った学び」を大事にしたい

・心の安定が不登校の減少につながる。

◎多様化する子どもについて

・年々増えている外国籍（外国にルーツのある）の子どもについて大事に考えたい。

◎その他

・次期学習指導要領の方向も踏まえて考えたい。

・広域（箕輪町と）で考えることも必要ではないか。

(10) 第 10 回　　2025 年（令和 7 年）11 月 20 日（木）午後 6 時 30 分～

① 協議事項

a ：全体討議「検討事項にかかわっての論点整理」

・少子化の進展に対応した新たな学校づくりについて

・就学前から一貫した支援・指導のあり方について

前回の委員会での検討を受けて加除修正した「論点整理」について、全体で検討した。

・「小中一貫教育」については、委員会でまとめられたことなのか。
　→第８回委員会において全体で確認した。
・「小中一貫教育」は、学級数確保のため、やむなくそうするというイメージが強い。
・小学校から中学校への進学は子どもにとって一つの節目になるのだが、一貫教育にするとそれがなくなる。変われるチャンスもなくなってしまう。
　→例えば４・３・２と分けることで、それぞれのステップが節目となり、次のステップへの期待が持てることになる。

・「道草ができない」ことは大きな課題なのか。「地域の自然や地域社会と触れ合う機会が減る」という表現はどうか。
・「『学校の姿』を十分な検討を行ったうえで進めていきたい」とあるが、今まで『学校の姿』を皆で話し合ってきたのではないか。
・「保護者・PTA」という言葉がない。

・どういう検討をしてどういう結論に位置づいたかという流れがよくわからない。
・「小学校の集約」と「小中一貫教育」の関係がわからない。
・検討事項の①②③についてはまとめてあるが、abc に沿ってはまとめられていない。

・「小中一貫教育」は既に両小野小中で実施されているので、成果等は参考にすればよい。
・次期学習指導要領では、様々な背景をもつ子どもが柔軟性をもって共有できる環境が求められている。
・「集約する目安や基準、ルールを設ける」という意見もあったということを

載せておいてほしい。